

授業改善に関する実践的研究 7. 新しい授業づくりと形成的評価

米谷 淳 (神戸大学大学教育研究センター助教授)

授業改善に関する実践的研究

7. 新しい授業づくりと形成的評価

米谷 淳（神戸大学大学教育研究センター助教授）

1. 新「心と行動」の授業づくりと授業実践

経緯

私は平成6年度に神戸大学に赴任して以来、毎学期「心と行動」という全学共通授業科目を担当している。私が担当する「心と行動」のねらいは「学部で心理学を専攻しない学生に、さまざまなトピックスを通して、行動科学としての現代心理学のあり方を理解させる」ことである。平成12年度までは前期に工学部、後期に社会系学部（法学部、経済学部、経営学部）の2年生以上の学生を受け持ってきた。はじめはどちらも同じ内容（表1）であったが、平成8年度からは社会系学部に対しては社会心理学のトピックスを盛り込んだもの（表2）に改めた。その理由は、第一に、当初の授業がそれまでの私の工学部系大学での非常勤の授業（教養の心理学）をもとに設計されていたので社会系学部の学生に対しては対人行動や集団のトピックを中心とした授業をやりたいと考えていたこと、第二に、社会系学部に対する「心と行動」の授業中に学生に書かせた感想に社会心理学のトピックについての要望が多く、それを授業で取り上げたときの学生の反応がよかったためである。平成13年度より時間割の大幅変更に伴い、後期の「心と行動」の対象学部がそれまでの社会系学部から人文系学部（文学部と心理系を除く発達科学部文系）に変更となった。これに伴い、「心と行動」の模様替えを行った。工学部対象の前期の授業（表3）は、それまで教科書に使用していたものが絶版となったため平成13年度前期より新たな教科書にして、授業内容もそれに対応して若干改めたが、重要事項や主な視聴覚教材などは以前とほとんど変えていない。これに対し、後期の「心と行動」をこれまでとまったく異なる新しい授業とすることにした。これは、人文系学部は1年次に「心理学」（通年4単位）を履修する学生がかなりおり、学部で心理学を専攻しなくても人間関係や社会心理についての授業を履修する機会が多いことなどを鑑み、これまでの工学部や社会系学部の学生を対象とした授業とは内容だけでなく、ねらいそのものを改めるべきと判断したためである。

表1 「心と行動」(平成7年度前期、工学部対象)のシラバス

科目区分	教養原論(人文)
担当教官	米谷 淳
主 題	人間形成と文化
対象学部	工学部
開講学期	前期 水曜日・1時限
心と行動(2単位)	
授業のテーマと目標	<p>本講義では現代人の認識と行動を取り扱う行動科学の中心領域のひとつとしての現代心理学のひとつのあり方を提示する。現代心理学は基礎心理学的側面だけでなく、応用心理学的側面にもウェイトを置いて、学際的・問題解決的にアプローチをとるところに特徴がある。本年度ははじめに心理学を身近な問題にひきつけてとらえていくために、「映画で学ぶ人間関係」というテーマで映画作品をとりあげ、そこに描かれている登場人物の心理やストーリーがどのように表現されているかをみる。次に、心理学の誕生から行動科学への発展を概観し、主要な心理学研究法を解説する。後半は、基礎心理学的領域と応用心理学的領域からいくつかトピックスを選び、キーワードを説明したり、模擬実験をしたりして、心と行動がどのような構造と法則性をもっているかを学ばせたい。授業は従来の講義形式にとらわれず、オーディオ・ビジュアル教材をふんだんにとり入れたメディアミックス形式として行動を科学する方法を体験的に学習させる。この授業が心理学を専攻しない学生に自分の生活や専攻する分野に行動科学的アプローチをとり入れるきっかけになればと思っている。</p>
授業の内容と計画(予定)	
第1回	オリエンテーション
第2回	映画で学ぶ人間関係(1)
第3回	映画で学ぶ人間関係(2)
第4回	心理学の歴史(1) プスケのロゴスからヴント実験心理学まで
第5回	心理学の歴史(2) ゲシュタルト心理学とフロイトの精神分析学
第6回	心理学の歴史(3) 行動の科学と行動科学
第7回	心理学研究法 観察・調査・実験・検査・臨床
第8回	基礎心理学のトピックス(1) 知覚
第9回	基礎心理学のトピックス(2) 学習
第10回	基礎心理学のトピックス(3) 認知
第11回	応用心理学のトピックス(1) エイジング
第12回	応用心理学のトピックス(2) 反健康運動
第13回	応用心理学のトピックス(3) 交通行動
履修上の注意	<p>講義の前に指示された教科書等の該当範囲は必ず読んでおくこと。授業中にキーワードをすべて説明するとは限らないので、平凡社の「心理学事典」や岩波の「心理学小辞典」などでキーワードを調べて、その意味をよく理解しておくこと。また、授業中に小テストやアンケートを課すことがあるので、課題提出用のB5版のレポート用紙、あるいはそれに準ずるものを毎回用意しておくこと。</p>
成績評価方法	<p>評価は、期末試験、授業中の小テストや課題、授業への積極的な参加態度の3点をもとに、厳正かつ公正に行う。レポートは義務ではないが、随時受け付ける。できるだけフィードバックし、よいものは評価に加味する。</p>
教科書・参考書	<p>吉田・蓮花・金川・佐古・米谷 「行動科学ハンドブック」 福村出版 蓮花・西川 「現代都市の行動学」 福村出版</p>
学生へのメッセージ	<p>受け身で参加するにはきつい授業ですので、楽をしたければとってはなりません。授業ではできるだけ新しく、話題性に富んだトピックスや教材を出していく予定ですので、やる気のある学生は期待できると思います。</p>

表2 「心と行動」(平成10年度後期、社会系学部対象)のシラバス

科目区分	教養原論(人文)
主 題	人間形成と文化
対象学部	法学部・経済学部・経営学部
担当教官(所属)	米 谷 淳(大学教育研究センター)
開講学期	後期 金曜日・2時限
研究室	D527
715777-	水曜12:00~13:30
電話番号	078-803-0836
心と行動(2単位)	
授業のテーマと目標	
	本年度は社会心理学や応用心理学のトピックスを中心に、人間関係や社会行動について、その構造と法則性を明らかにしようとする行動科学的アプローチを講じたい。授業では、『現代都市の行動学』をテキストにして、そこに紹介された学説や実験などを説明する。さらに、それらの問題を各自にひきつけてとらえさせるために、毎回、課題を出し、それに対して各自の考えをまとめる作業をさせる。
授業の内容と計画(予定)	
1. オリエンテーション	社会行動を科学する。
課題	社会心理学を社会、心理学の語を使わずに定義せよ。
2. 社会的行動実験(1章)	
課題	ミルグラムの服従の実験を説明し、心理学実験の意義、制約について論じよ。
3. 同調の実験(2章 1、2)	同調行動、アッシュの実験
課題	アッシュの同調の実験を説明せよ。
4. 同調の理論	フェスティンガー、社会的比較理論、ドイッチュ、情報の影響、規範的影響、モスコビット、少数派
課題	同調についての主な社会心理学者の立場を述べよ。
5. ソーシャル・サポート(3章)	キティ・ジェノベーゼ事件、援助、向社会的行動、ソーシャル・サポート、個人規範、社会規範
課題	ソーシャル・サポートの社会情緒的サポートを具体的に説明せよ。
6. 対人行動(5章 1、2)	アーガイル、まなざしの法則
課題	アーガイルのまなざしの法則を3つ以上あげよ。
7. テレコミュニケーション(6章 1、2、4)	
課題	マルチメディアがテレコミュニケーションにおいて果たす役割を説明せよ。
8. マスコミュニケーション(6章 第3節)	テレビ
課題	テレビに関する社会心理学的研究をひとつあげ、詳しく説明せよ。
9. 友人選択(7章 3、資料)	類似性、外見的魅力、好きであること、近接性、コミュニケーション、相補性
課題	あなたの友人がもっている魅力について心理学的考察を加えよ。
10. 好きになることと愛すること(7章 2節、資料)	
課題	好きになることと愛することについてのルビン、デービス、スタンバーグの説を比較し、あなたはそのどれを指示するか、また、その理由を述べよ。
11. 説得(第8章)	foot in the doorテクニック、door in the faceテクニック
課題	あなたは、卒業旅行に海外旅行にある友人と一緒にいきたい。foot in the doorテクニックを用いて説得する作戦を具体的に立てなさい。
12. 被服行動(16章)	
課題	神山進の被服行動の対人コミュニケーションにおける5つの機能のそれぞれの観点から、いまあなたが着ている服装(化粧・アクセサリーも含む)を評価しなさい。
13. 流行(17章)	
課題	ロジャースの『イノベーションの採用者カテゴリー』のうちあなたはどれに属するか。その理由をできるだけ具体的に、詳しく説明しなさい。
履修上の注意	
	講義の前に指示された教科書等の該当範囲は必ず読んでおくこと。また、授業中に小テストやアンケートを課すことがあるので、課題提出用のB5版のレポート用紙、あるいはそれに準ずるものを毎回用意しておくこと。
成績評価方法	
	評価は、期末試験、授業中の小テストや課題、授業への積極的な参加態度の3点をもとに、厳正かつ公正に行う。レポートは義務ではないが、随時受け付ける。できるだけフィードバックし、よいものは評価に加味する。
教科書・参考書	
	蓮花一己・西川正之 『現代都市の行動学』 (福村出版)
学生へのメッセージ	
	受け身で参加するにはきつい授業ですので、楽をしたければとってはなりません。授業ではできるだけ新しく、話題性に富んだトピックスや教材を出していく予定ですので、やる気のある学生は期待できると思います。

表3 「心と行動」(平成13年度前期、工学部対象)のシラバス

<p>心と行動 (2単位)</p> <p>科目区分等 教養原論(人文)</p> <p>主 題 人間形成と文化</p> <p>対 象 工学部</p> <p>開講期 前期 月曜日・3限</p> <p>担当教官名(所属) 米谷 淳(大学教育研究センター)</p> <p>研究室番号 D527</p> <p>ワイスワー 水曜日・昼休み</p> <p>【授業のテーマと目標】</p> <p>現代心理学は行動科学の中心領域であり、学際的・問題解決的アプローチを重視する。この講義のねらいは、心理学を専門としない学生に、現代心理学のさまざまなトピックスを紹介することにより、行動科学的アプローチの方法や心理学的なものを見方を身につけてもらうことにある。今年度の授業では教科書を中心に進めるが、実験やデモンストレーションも取り入れて学生が体験を通して心理学を学べるよう工夫する。</p> <p>【授業の内容と計画】</p> <p>授業は、一部を除き、教科書の章立てに沿って進める。以下の()は教科書の該当箇所である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 行動科学とは何か(序章) 2. 行動科学の世界 3. 対人行動(2章) 4. 集団(3章) 5. 異文化(4章) 6. ワークスペース・デザイン(5章) 7. 赤ちゃん(6章) 8. 青年期(1章、7章) 9. 知覚(10章) 10. 学習(11章) 11. 記憶(12章) 12. 思考(13章) <p>【成績評価方法と基準】</p> <p>授業中の小テスト・課題、レポート(指定されたテーマについて複数の文献を調べて、それらを引用しながら自分の考えを論じたもの、レポート用紙10枚程度)、試験(教科書のみ持ち込み可)の3つを総合評価する。受講態度の悪い者は減点の対象とする。</p> <p>【教科書・参考書】</p> <p>教科書:米谷 淳・米澤好史(編著) 『行動科学への招待』(福村出版)</p> <p>【履修上の注意】</p> <p>授業には必ず教科書を持ってくること。また、授業で教科書を全て読むわけではないが、授業で取り上げない部分についても、試験の範囲に含める。随時、授業中に小テストや課題をさせるので、提出用の用紙(レポート用紙の類)を用意しておくこと。</p> <p>【学生へのメッセージ】</p> <p>授業の一環として皆さんに実験やアンケートなどの作業をどんどんやってもらう予定です。とにかく現場に触れることが第一です。</p>
--

新「心と行動」の授業設計

新たに受け持つことになった人文系学生にどのような内容をどういった形態で教えるべきかを考える前に、まず、そもそも教養原論とは何か、教養教育とは何かといったことに立ち返ってみることにした。

教養教育については、平成13年度に以下の文章が「神戸大学の教養教育の目的」と定められた。

学生の『人間と社会、人間と自然』に関する幅広い知識と深い洞察力を培い、これに基づいた創造力を涵養するとともに、知的教養人としての使命の自覚を促し、ますます複雑化していく社会の中で適正な批判力と判断力をもって行動しうる知性と能力及び豊かな人間性を育む。

また、教養原論の教育上の目的については「平成13年度教養教育実態調査報告書」の中で以下のように説明されている。

- (1) 個々の主題の教育内容を、相互に関連性のある総体として、学生に提供すること。
- (2) 現代社会の要請に適切に応え、調和のとれた全人教育を目的とする教育内容を設定すること。
- (3) 必修科目及び選択科目を、教養教育のカリキュラム運用上、最も効果的に設定すること。また、同一教育分野に関わる複数の主題の中から必要な授業科目を学生が選択することにより、自由選択制のもつ長所も活かすこと。
- (4) 人文科学・社会科学・自然科学の3分野の学部がバランスよく編成されている本学の特色を生かし、教養原論の3つの分野全てに関して、各学問分野の研究の最前線に立つ教官による最良の教養教育を行うこと。

私の受け持つ授業も神戸大学の教養教育の一環であり、しかも、「教養原論」のひとつとして提供されるものである。授業の目標がそれらの目的に沿ったものでなければならない。ただし、どこにアクセントを置くか、また、どういった形でこれらの精神を授業という形で表すかなどについては、それぞれの担当者に委ねられていると考える。むろん、どうしてそうしたか、さらに、結果はどうであったかを、いつでもつまびらかにしなければならない。授業者にも説明責任と結果責任があり、事前説明と事後評価が課せられている。

しかし、私は今回の授業づくりについてもこれまでの私が授業設計の柱としてきた「私らしい授業」「私ならではの授業」「私にしかできない授業」となるよう努めた。そこで、「教養教育の目的」にある「豊かな人間性」の重要な要素である対人技能をテーマとして、対人コミュニケーション研究の「最前線に立つ」一人の研究者・実践家としての立場から、これまでの講義一辺倒とは違う授業をつくりあげることにした。昨年の紀要で報告したように現在私はグループセッションによる対人技能訓練の開発を進めており、私が長年携わってきた看護師リーダー研修で効果を確認してきた集団技法と教材をもとにして教養教育としての＜対人コミュニケーション入門＞の授業を作り上げることが可能ではないかという考えをもっている。また、そうした授業が、昨今の大学生の不得意分野と指摘されている対人コミュニケーションや集団討議の力を向上させるために有効であり必要であると考えている。こうした考えにもとづき、グループセッションを多用した学生参加型・体験型の＜対人コミュニケーション入門＞の授業設計を行った（表4）。

表4 「心と行動」(平成13年度後期、人文系学部対象)のシラバス

<p>心と行動 (2単位)</p> <p>科目区分等 教養原論(人文)</p> <p>主 題 人間形成と文化</p> <p>対 象 文学部・発達科学部(人間発達科学科・人間行動・表現学科)</p> <p>開 講 期 後期 月曜日・2限</p> <p>担当教官名(所属) 米谷 淳(大学教育研究センター)</p> <p>研究室番号 D527 オフィス 水曜日・昼休み</p> <p>【授業のテーマと目標】</p> <p><対人コミュニケーション入門>この授業のねらいは、人間の心理・行動に関心をもつ学生に行動科学的アプローチを理解させることにある。今回とりあげるテーマは対人コミュニケーションであり、具体的事例としては、私がこれまで取り組んできた看護コミュニケーション場面におけるものを取り上げる。前半の授業で対人コミュニケーションに関する基本事項を解説した後、後半ではさまざまな事例をとりあげて、問題解決のシミュレーションを試みたい。</p> <p>なお、この授業は「心理学概論」でも「心理学入門」でもない。心理学を専攻する学生でも履修して意味のある科目となるよう工夫しながら授業を進めるつもりであり、適時、受講生の意見を求めながら、微調整をしていく予定である。</p> <p>【授業の内容と計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 行動科学的アプローチとは何か 2. 対人コミュニケーション入門 3. 対人コミュニケーションの目標 4. 対人コミュニケーションの課題(1) 自己管理 5. 対人コミュニケーションの課題(2) 対人技能 6. 対人コミュニケーションの課題(3) 集団過程 7. 事例検討 <p>【成績評価方法と基準】</p> <p>毎回の感想文と授業中の課題、及び、「ふりかえり」のレポートで評価します。なお、3割以上欠席した場合はレポートを提出しても「無効」とします。</p> <p>【教科書・参考書】</p> <p>教科書: 米谷 淳・鎌田美智子 『看護場面におけるコミュニケーション・ガイド』(日総研)</p> <p>参考書: 看護対人行動学研究会(編) 『リーダーシップ&コミュニケーション対処術』(日総研)</p> <p>【履修上の注意】</p> <p>教科書は必ず授業に持ってきて下さい。また、できるだけ、個人作業やグループワークを盛り込みたいと思っているので、とにかく授業に出て、積極的に参加して下さい。毎回、授業の終わりに感想文を書いて、提出していただきます。</p> <p>【学生へのメッセージ】</p> <p>積極的にグループワークに参加し、まわりの人と話し、聞き、考えることを楽しみましょう。</p>
--

新「心と行動」の実施概要

平成13年度、平成14年度ともに人文系学部を対象とした後期の「心と行動」の授業計画は同じである。ただし、平成14年度のシラバスには【授業のテーマと目標】の最後に授業から得られる教育効果についての下記の説明を加え、授業目標をより明確にした。

<p>この授業を履修することにより次の事項が期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行動科学的アプローチの特徴がわかる。 ・ 対人コミュニケーションの基本事項を習得する。 ・ 実際に対人技能訓練に触れてみるができる。 ・ 看護場面における対人コミュニケーションの問題を知る。 ・ 人間関係上のトラブル対処の基本が身につく。
--

両年度とも授業途中での休講はなく、授業回数とともに13回であった。なお、平成14年度は月曜日に祝日が多かったための全学的措置として第12回と第13回をそれぞれ授業期間の最終週の火曜日と水曜日の1限目に行った。平成13年度は初回到授業のねらいと進め方、および成績評価について説明した後、行動科学的アプローチとこの

授業との関係について解説した。第2回・第3回では「対人コミュニケーション入門」として、コミュニケーションのモデルや対人コミュニケーションという見方について個人作業をしながら解説した。第4回・第5回は教科書をもとに対人コミュニケーションの目標について講じた。第6回・第7回では対人コミュニケーションの第一の課題である自己管理をとりあげ、性格検査を学生にやらせて自己分析させた。第8回～第10回では対人コミュニケーションの第二の課題である対人技能をとりあげ、ノンバーバル行動についての解説や社会的技能訓練のデモンストレーションや実験を行った。第11回・第12回は事例検討を行った他、ノンバーバル行動に関する心理学実験に参加させた。第13回は事例検討のセッションを行い、レポート受付等を行った。平成14年度では、全体の流れは大体一緒だが、初回のオリエンテーションに続く2回の授業を理学実験にあてた他、性格検査を行わず、平成13年度には扱わなかった集団過程の問題を取り上げ、ある高校のバスケットボールクラブのユニークな練習風景を紹介したVTRを見せてその感想を書かせて小グループで話し合わせた他、平成13年度に十分できなかった事例検討のセッションを2日間丁寧にやらせるなどの変更点があった。

2. 学生による授業評価－形成的評価の試み－

形成的評価の導入と技術的サポート

この授業では毎回、必ず学生にあるテーマについての自分の考えを書かせる課題を与えて授業終了時に提出させたが、あわせてその日の授業の感想を数行でよいから書くように指示した。したがって、学生の授業についての反応については感想文からある程度把握できた。また、大学教育研究センターはすべての全学共通授業科目について学生による授業評価を毎学期授業終了直前に実施しており、その結果により客観的な評価が行える。しかしながら、その評価は他の講義科目と同一の質問紙により一斉に実施され、しかも、その結果のフィードバックが回収後3ヶ月近く遅れるため、その学期の授業に授業評価を生かすことができないという難点がある。こうした総括的評価の問題を解決し、その学期の後の授業を進める上で役立つものとするために、平成14年度の授業では第9回にあたる12月16日に学生アンケート（授業評価）を実施することにした。

しかし、もし従来のように質問紙に直接記入させて授業担当者が一人でデータ入力をする場合、100名を越すクラスでは並大抵の労力ではないことは確かである。これは以前から授業担当者が客観的な授業評価を行う際の障害となっていた。そこで、こうした障害を克服するひとつの手立てとして、現在大学教育研究センターが毎学期学生の授業評価に使用しているマークシートを利用し、国際文化学部にあるマークシート読取装置（OMR）でそれを読み込ませることにした。さらに、読み込ませたデータを集計して、それぞれの項目についての回答分布と平均と標準偏差を計算し印字するプログラムをつくった。これによりアンケートのデータ集計にほとんど手間がかからなくなった。現在、このシステムにより、授業担当者が自分でマークシートを持ってくれば、教務職員が補助しながらマークシートの読み取りと集計ができるようになっている（図1）。

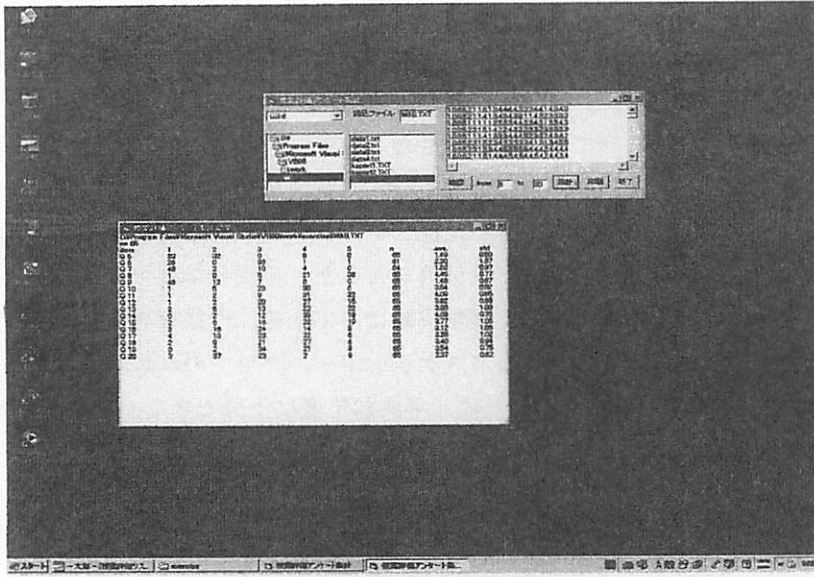


図1 授業評価（学生アンケート）集計システム

質問表とマークシートは第9回の授業開始時に学生に配布し、授業中にアンケートについての説明と協力要請を行い、授業終了時に回収した。今回のアンケートは記名とした。記名とした理由は主に他のデータとのクロス分析を行うからであるが、出席カードとしても用いるためでもあった。回収できたマークシートは131あった。

質問1～質問3はそれぞれ学生の性別、学部、学年を問うものであったが、これらは今回は使用しなかった。質問4から質問25までは、質問16を除き5段階尺度で評定させるものであり、すべて1が最も悪く5が最も良い評価となっていた。質問16はクラスサイズについての質問項目であり、これまでの学生アンケートでは5段階評定で1が「小さすぎる」で、5が「大きすぎる」となっていたが、平成14年度後期から1「大いに改善の余地がある」～3「現状でよい」の3段階となった。

方法

今回は形成的評価の試みとして、これまで実施してきた学生アンケートと同じ20項目に加え、今学期の後の授業に役立つための質問項目を5つ追加した25項目（補遺）を設定し、学生アンケートの際に配布した質問表の裏面に5つの追加項目（質問21～質問25）を印刷したものを配布して、それに対する回答をマークシートに記入させた。現行のマークシートは5択式に設定された回答欄が30あるもので、5択式の設定であれば従来の20項目に、さらに10項目まで追加できる。

表5 学生による授業評価（5段階評定の平均値）* クラスサイズの項目はCは3段階

項目	内容	A	B	C	t検定の結果 5%水準で有意差 がみられた関係
		工学部 2002前	人文系 2001後	人文系 2002後	
4	出席	4.37	4.41	4.58	A<C
5	勉強時間	1.41	1.38	1.45	
6	受講態度	3.06	3.58	3.66	A<B,A<C
7	教員熱意	3.93	4.15	3.98	A<B
8	教員親切	3.62	3.87	3.44	C<A<B
9	成績基準	3.63	3.96	3.98	A<B,A<C
10	授業準備	3.83	4.10	4.07	A<B,A<C
11	話し方明瞭	3.87	3.82	3.70	
12	板書OHP	3.49	3.27	3.22	A>C
13	教科書適切	3.58	3.35	3.32	A>C
14	私語注意	3.21	3.59	3.96	A<B<C
15	シラバス通り	3.28	3.63	3.44	A<B
17	授業理解	3.29	3.51	3.57	A<B,A<C
18	興味増加	3.57	3.77	3.75	A<C
19	内容適切	3.80	3.99	3.93	
20	総合判断	3.74	3.75	3.95	A<C
21	グループセッション			3.20	
22	映像教材			3.97	
23	教科書をもっと			2.69	
24	教員との話し合い			3.06	
25	平常点での成績評価			4.22	
回答者		197	78	131	

結果・考察

平成14年度の第9回目に実施した学生アンケートの集計結果を表5に示す。表5には比較のために、平成13年度の前期と後期に大学教育研究センターが実施した総括的評価の結果を掲げてある。平成13年度前期は工学部対象の「心と行動」であり授業内容が大きく異なること、また、平成13年度後期は平成14年度後期とほとんど同じ授業内容であるが、実施時期が授業期間の最後（第12回）であったことに注意されたい。

結果から平成14年度後期の第9回までの授業については、「勉強時間」を除く従来の授業評価項目（質問5～質問20）はすべて3以上であり、「出席」と「授業準備」は平均が4.0を上回っている。なお、クラスサイズについて3段階で評定させた質問16の平均は2.55（標準偏差 0.61）であり、おおむね「現状でよい」と考えていることがわかった。

それでは、この結果（表5C）を、旧「心と行動」についての総括的評価（表5A）と新「心と行動」の昨年度の総括的評価（表5B）と見比べながら、平成14年度後期の第9回までの授業の評価（形成的評価）を行うことにしよう。表5の一番右の列には3つの群から2つずつ組み合わせて独立2群の平均値の差の検定（t検定）をした結果、有意差が認められた関係をまとめた。それを見ると17項目中14項目について、いずれか、あるいは、すべての組み合わせに有意差が認められたことがわかる。これも参考にしながら、いくつかの項目を考察する。

①出席

「心と行動」の授業では毎回点呼はしていないが、随時感想を書かせたり、課題を書かせて提出させることにより学生の出席状況を把握してきた。また、そうした提出物を授業終了時に出しておくことにより「出席点」を与えることも明言していた。こうしたことにより、出席率は以前から最低でも7割程度あった。表5をみてもA、B、Cともに4（70%-90%）以上であり、そのことが裏付けられる。ところで、旧プログラムでは出席重視はしておらず、「出席点」が成績評価に与える比重も1割程度しかないことは授業中にも公言したのに対し、新プログラムの成績評価はレポートと平常点によるとし、3割を超えて欠席した学生には単位を与えないことを公言していた。それゆえ、たとえそれまでも出席状況がよかったとしても、BがAよりわずかに値が上がっているものの有意差が認められなかったことがなぜだかよくわからない。一方、CはAより有意に高い値（df=324, t=2.197, p<.05）であり、有意ではないにせよBよりも高い値である。これは、新プログラムが実際に出席重視であることを平成13年度の受講生から聞いた人文系学部学生が休まず出席するようになったことを意味しているのかもしれない。

②勉強時間

1週間当たりの勉強時間についての評価値はA、B、Cとも平均が1.5に満たない。選択肢の1が「全くしなかった」、2が「15分以内」であることを考えると、ほとんどの学生が授業時間以外に全く勉強していないことになる。これは他の教養原論の科目にも共通して見られる特徴であるが、この結果からただちに学生が全く勉強していないと言うことはできない。この質問はあくまで各回の授業に関する学生の勉強時間を聞いたものであり、レポート作成や試験準備の時間を含めて答えた学生はいないだろうと考える。ほとんどの科目は、総括的授業評価の実施時期のあと最終回の授業があり、それから1～2週後に試験やレポート提出となるからである。

平成14年度後期の授業ではレポートを2点課しており、どれも本を読み、自分のコメントをまとめるという作業であるので、3時間以上はかかっていると推測される。5頁以上のレポートを提出した学生も少なくなく、数日をかけてレポートを仕上げた学生もかなりいただろう。

そもそも教養原論は、学部の概論の講義のように、特定の分野に必須の知識を習得させることをねらいとしてはいないし、専門の講義や実験実習に追われている学生が、予復習を丁寧にしなければついていけないような教養の授業を希望するとも思えない。新「心と行動」は学生に毎回の授業に出てきて、私の話を聞き、自分の考えをまとめ、周りの学生と話し合うことを最重要視している。それゆえ、学生の出席率は他の教養原論と比べてき

わめて高い。また、毎週勉強をする必要はないとしているが、今回は、教科書の最初の2章を読んでコメントを書く課題と、冬休みに対人技能に関する本を1冊読み上げて、コメントを書き上げる課題をすべての受講生に課したところ、ほとんどの学生がそれをしてきた。これだけの勉強をすれば、予習復習などしなくても十分だろうと考える。

③板書・OHP、教科書・資料

質問12と質問13は新プログラム（B、C）が旧プログラム（A）よりも評価が悪い。この理由のひとつは両者の授業の進め方にあると思われる。私の板書の字はあまり読みやすいほうではない。授業感想には「もっといねいに黒板に書いてください」という要求がよく書かれる。そのため日ごろから黒板にはできるだけ丁寧に見やすい字を書こうとするが、時間がなくなったり、書くことが多すぎると、しばしば字は小さく雑になってしまう。新プログラムではグループセッションに追われて説明の時間が少なくなり、こうした悪癖が顔を見せたのだろう。また、教科書・資料の適切さについては、旧プログラムより評価が下がることは予測していた。新プログラムで使用した教科書は看護学生のために書かれたものであり、対人コミュニケーションについて丁寧に説明してあるものの、事例もすべて看護場面であり、人文系学部の学生にはなじみのないものであつただろう。ある学生は「自分たちにあつた事例でグループセッションがしたかった」という感想を書いてきた。今後、一般の大学生の事例を盛り込んだ対人コミュニケーションの教科書をつくる必要があると感じているが、これはなかなか容易ではなく、しばらくこうした指摘がなされることを甘んじて受け止めるしかないだろう。とはいえ、たとえ看護学生でなくても看護コミュニケーションの事例を扱うことの意味は少なくないので、授業中にもっとこのことを理解させるような努力と工夫をすべきだし、実際私はそう受け止めている。

④ 授業理解、興味増加、総合判断

CとAとを比較すると、「授業理解」「興味増加」「総合判断」の項目について、どれも有意に高い評価値を示している（t検定の結果はそれぞれ、 $df=130$, $t=7.60$, $p<.001$; $df=130$, $t=3.43$, $p<.001$; $df=129$, $t=2.32$, $p<.01$ ）。これは新プログラムが旧プログラムに勝るとも劣らぬほど成功していることを示すものと解釈できる。もちろん、新プログラムと旧プログラムのどちらがより優れているかを論じることは無意味である。どちらも対象学部が異なり、授業目標も異なるからである。工学部生には工学部生のニーズと関心があり、今のところ、現行のプログラムが私の授業としては最善と考えている。したがって、今回の結果をもとに工学部生にも人文系学部生と同じ新プログラムを行おうとは考えていないし、そうした結論を導くことは誤りと考える。工学部生は他の時間で心理学について聞くことはおそくないだろう。そのような学生に対しては、やや概論的な授業形態にしたほうがよいと考えている。

3. 授業に対する学生の態度についてのアンケート—もうひとつの授業評価

今回の授業評価の特徴は、授業期間の中間で実施してただちに分析し、その結果をそれ以後の授業にできるだけ反映させることにあつた。こうした形成的評価のための学生アンケートにおいては、学生に一般的な授業評価をさせるだけでなく、新プログラムのやり方についての学生の態度（賛否）を聞くことも意味があるだろう。毎回の授業の雰囲気や毎回提出される感想から、大体その授業がうまくいっているかどうかの判断はつく。しかしながら、そうした主観的な判断が実際の学生の意見分布とどのくらい一致し、あるいは、どのくらいずれているかを知ることが大切である。ただし、こうした趣旨でのアンケートは頻繁にやる必要はないだろう。一度か二度やってずれがそれほどでないことが確認できれば、それでよいと思っている。

授業評価には総括的評価と形成的評価の他に診断的評価というものがある。診断的評価とは、たとえば語学や数学で能力別や実力別のクラス編成をしようとする際に行うクラス分けテストのように、学習にとりかかる前の

学習者の水準を見極めるものである。ある中学校の体育の授業では総括的評価と形成的評価と診断的評価を組み合わせた学習評価を「生徒一人ひとりが評価活動を通して、学習のねらいや達成状況のしかたなどについて、今持っている力を把握し、さらに学習活動を深めることができるように行う。また、教師は生徒の自己評価や他者評価を手がかりにして、指導の内容が生徒の実態に合っていたかを確認、授業改善に役立てるために行う」

(上地 1990、127頁より引用)ものとして位置づけている。大学における授業評価の文脈で考えるならば、ある授業を始める前にあらかじめその授業に対する学生のレディネス、予備知識、興味・関心などを調べる目的で行うテストやアンケート等が診断的評価といえるだろう。今回の授業期間の中間の時点で実施した学生アンケートに盛り込んだ質問21から質問25はこうした診断的評価の要素を含むものである。

表5が示すように、これらの項目に対する学生の回答をまとめると、次のことが言えるだろう。学生のほとんどが出席や課題やレポートで成績評価をすることはよいことであり、授業中にもっとビデオなどの映像教材を見せてほしいと思っている。また、グループセッションに対してはやや支持している方であるが、授業中の教科書の使用や教員との話し合いを増やすことには賛成でもなければ反対でもない。これは私が感じている学生の実態とよく合っている。授業中に「教員と学生とのやりとりをもっとすべき」とか「教科書をていねいにカバーすべき」という議論があり、こうしたことを授業評価の項目に入れている大学もあるが、私はこれは学生のニーズや期待とは異なるものであると考える。学生に迎合することは、よい教師の姿勢とは言えないだろうが、学生の態度や価値観を無視した授業評価をし、それを指標に授業改善をするなら、授業は学生にますます受け入れられなくなるだろうし、教員の努力に見合って教育効果が上がることもないだろう。

ところで、診断的評価であれ形成的評価であれ、学生にとって自分たちの回答が全体でどのようなものであったか、また、その結果を教員がどのように受け止めたかを、授業中に、しかも、なるべく早い時期に知りたいだろうと考える。黙々と結果を踏まえた日々の授業実践を通して学生にアンケート結果がその後の授業に生かされていることを示していくことも大切だろうが、コトバや文字を通して明確にアンケートの結果を学生に知らせることも大いに意味があると考えている。コミュニケーションの促進にとってバックチャネルやフィードバックは不可欠であり、これが妨げられるとコミュニケーションは不活発となり、力を失う。学生に学生からの声を返してやることも形成的評価の重要な要素ではなかろうか。

私はこれら5つの質問項目についての意見分布を第10回の授業の最初に黒板に書いて学生に示した。そして、「おおむね今のやり方が支持されているようなので、このままのやり方で続ける。ただし、要望が多かった映像教材についてはこの後もできるだけ使用するように努める。」と話し、その後のほとんどの回で何らかの映像を授業中に見せるようにした。こうしたことは単に学生からの評価をあげるためにしているのでは決してない。むしろ、学生に授業評価が実際に授業に生かされていることを行動で示すことが、今後もさまざまな授業評価を真摯に協力的にやってもらうために不可欠な最低限のマナーであると考えているからである。

文献

上地幸市(1990)「形成的評価を導入した体育学習の考え方と進め方」 梶田叡一 編著 『中学校新しい授業づくりと形成的評価』 東京書籍 126頁～140頁

補遺 授業評価に用いたアンケート

(質問4から質問20までは神戸大学大学教育研究センターが毎学期すべての全学共通授業科目を対象に実施している学生アンケートと同じである。質問1～質問3は省略。)

あなたのこの授業に対する取り組みについて伺います。

- (4) この授業にどれくらい出席しましたか。
1. 30%以下 2. 30%～50% 3. 50%～70% 4. 70%～90% 5. 90%以上
- (5) 授業時間以外に、この授業に関して毎回どのくらい勉強しましたか。
1. 全くしなかった 2. 15分以内 3. 15分～30分 4. 30分～90分 5. 60分以上
- (6) 授業中の受講態度はどうでしたか。
1. 全く積極的でない 2. あまり積極的でない 3. どちらともいえない 4. ある程度積極的
5. 非常に積極的

この授業及び担当教官について、次の(1)～(15)の事項はどの程度あてはまりますか。5段階で評定してください。

(7)～(15)の5段階評定

1. 全くそう思わない(良くない) 2. あまりそう思わない(あまり良くない)
3. どちらともいえない(普通) 4. ややそう思う(良い) 5. 全くそう思う(非常に良い)

- (7) 授業への熱意が感じられた。
(8) 学生に対する接し方は親切であり、質問に対して熱心に答えてくれた。
(9) 成績評価の方法・基準が明確に示されていた。
(10) 授業の準備がしっかりなされていた。
(11) 話し方は明瞭で聞き取りやすかった。
(12) 板書・OHPなどは見やすく、ノートに書き取りやすかった。
(13) 教科書・資料は適切だった。
(14) 私語へ注意するなど、学習する雰囲気を保つように努力していた。
(15) シラバスに沿って授業が行われた。

この授業を受けた成果等について伺います。

- (16) 教室の学習環境はどうでしたか。
1. 大いに改善の余地がある 2. やや改善の余地がある 3. 現状でよい
- (17) 授業はよく理解できましたか。
1. 全く理解できなかった 2. 理解できなかったところが多い 3. どちらともいえない
4. ほぼ理解できた 5. 大変よく理解できた
- (18) この授業に対する興味は増加しましたか。
1. 非常に減少した 2. 減少した 3. どちらともいえない 4. 増加した 5. 非常に増加した
- (19) 授業内容は科目区分(教養原論、外国語、健康・スポーツ科学、専門基礎、総合教養等)にふさわしいものでしたか。
1. 全くそう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらともいえない 4. ややそう思う
5. 全くそう思う
- (20) 総合的に判断して、この授業を評価してください。
1. 全く為にならなかった 2. あまり為にならなかった 3. どちらともいえない
4. やや為になった 5. 大変為になった

次の21番から25番までには、それぞれについて5段階で評価してください。

1. 全く反対 2. やや反対 3. どちらともいえない 4. やや賛成 5. 全く賛成

- (21) 授業中にもっとグループセッションを取り入れてほしい。
(22) 授業中にもっとビデオなどの映像教材を見せてほしい。
(23) 授業ではもっと教科書を使ってほしい。
(24) 授業中に教員と学生の話し合いができるようにすべきだ。
(25) 出席や課題やレポートで成績評価をすることはよい。